



山を想う - 山に抱かれて -



山口 是治

1. はじめに

数えでは、来年「古希」を迎える齢となった。自分では、「まだまだ若い」と強く思う様にしているが、姿見をみるとガッカリしてしまう。

そんな中、今回のこの寄稿を機会に、どうしようもない外見に一喜一憂するのではなく、内面、しいては自分の歩んできた人生を振り返ってみることにした。

生来の「好奇心旺盛、かつ、しつこい」性格のため、勉強や仕事をはじめ、自分の身に起こったことや強制的にやらざるを得なくなったこと、やりたいことなどに対し、いつもポジティブに接してきた。そのため次から次へと抱え込んでしまい、以下に示す様に煩雑で、これにその都度の仕事の内容などを組み込むと收拾がつかなくなってしまう。

○学 業：小学校 (2)・中学校 (2)・高校・高専

高校1年卒業。家庭の事情で大学には行っていない。

○仕事①：常勤

旧建設省 (東北・関東)、国交省 (東北・関東)、環境省 (東北・本省)

○仕事②：非常勤・短期

旧環境庁 (公園)、旧文部省 (体育)、農水省 (東北)

○仕事③：嘱託・委嘱

山岳救助隊員 (宮城・山形)、山岳指導員 (宮城・山形)、国体競技役員 (宮城・山形・福島 山岳・カヌー・サッカー)、インターハイ競技役員 (宮城 山岳)、旧 TOHO (株)、建装工業(株) 全て本職。

○仕事④：アルバイト

新聞配達、農業、山菜採り、挿絵 (細密画)

○趣 味：生きている証し

登山・トレッキング、山菜採り、サイクリング、絵画、釣り、スポーツ観戦、音楽鑑賞、読書、農業、囲碁、将棋、自然との戯れ (花・鳥・散歩含む)

○その他：継続している公の団体 ファンクラブ

日本自然保護協会会員、日本野鳥の会特別会員、フォレスト友の会会員

読者のみなさんも「アレ?」とか「エッ!」となったのがあると思う。

まず学業の項で「高校1年卒業」は、今から50年以上前の国立の実業高校にあった制度で、私の場合は「国立仙台電波高校」だったが、法令で定められた「1年過程」があり、人事院規則でも定められた国家資格 (国際資格) を取得すると、下位の資格では高卒、中位の資格で短大卒、上位の資格で大卒と認められた。

当時は国立の実業高校があって、商船高校が富山など5か所、電波高校が仙台など3か所にあった。普通課程の高校は現在でも残っている。

次に仕事の項で、嘱託は今お世話になっている弊社と弊社の前にお世話になった会社。委嘱は、救助隊員や競技役員だが、ボランティアではなく、全て人事院が認めてくれ本業として扱われた。旧建設省の人事当局に「職務専念義務違反の恐れあり」として懲戒処分前までいったが、人事院の裁定で全て本業と認められたもの。プロなので報酬あり。

挿絵は、植物などを細密画として描き、1号200円~300円で引き取ってもらい生活費の一部にしていた。

趣味の項の釣りは、スポーツ新聞社が主催する釣り大会などで、優勝はないが何度か入賞している。船の免許もあるし、船そのものを保有したこともある。

農業は、家庭菜園ではなく、幼い時から家族の食い扶持だった。現在は宮城蔵王の中腹に畑として約2.6haの土地で大根など野菜や花を育てている。収穫物は売買していない。

その他の項の自然保護協会や野鳥の会は言うに及ばずだと思う。フォレストは日本テレビ系のコーラスグループで、全員が著名な音大を優秀な成績で卒業した皆さん。

以上の項目とともに、現在の実生活では障害者3名 (妻・2人の息子) の介護もある。

現在は、仕事として弊社東北支店の顧問、JCMA東北支部広報部会員と、自治会において大規模盛土や大規模擁壁問題などの自治体対応を行っている。

今回の寄稿にあたって、みなさんに何をお伝えするか悩んだけど、小学校入学前から自分に大きく係わり、その後も現在まで、人生観や生活そのものに大きな影響を与え続けてくれている山関係と、さらに人事院から本業（プロ）と認められた「山岳救助隊隊員」関係を中心にお伝えしてはどうかと考えた。

特に、スポーツクライミングが東京オリンピックの正式種目となったことや、また、「山ガール」などの語がトレンド・キーワードになるなど、さらにはTVなどにおいても、百名山や三百名山に係わる登山番組が連続しており、結構な登山ブームが到来していることを考慮すると丁度良い機会ではと思う。

読者の皆様の中にも、また、会員各社の皆様の中にも山に親しまれておられる方が沢山おられるのではないだろうか。

特筆すべきものはあまりないが、私の人格形成や人生に大きな影響を頂戴してきた山や植物などとの係わりについて振り返り、山への想いを述べてみようと思う。

2. 自然・山へのめり込む

【第1のポイント：幼い頃からの米作り、野菜作り、果樹作りや山菜採り】

小学校入学前の6歳の時、父が失踪した。自前で多少の田畑があったので、残された祖母・母・子供6人の家族は何とか食べることは出来たが、現金収入が途絶えてしまったので、一気に生活が苦しくなり生活保護世帯になってしまった。生活費を稼ぐため、母が日雇い、子供達は、新聞配達や近所の農家の手伝いなど。祖母と私（小学校入学前～中学卒業まで）の二人で、僅かながら米、野菜、桃などを栽培し、食べる分以外を農協に卸し、また、春先から初夏にかけては山菜採り（ワラビ、ゼンマイ、フキ、ミズ、シドケ、ワサビ etc.）などを行い、農協の選果場などに持って行って引き取ってもらった。

この頃は、コシアブラやタラノメなどは、食していたが売り物ではなかった。

この山菜採りは、最初の頃は、祖母と一緒にだったり、近所のお年寄りのみなさんと一緒にだったりしていたが、小学校3年の頃からはほとんど一人で山に入り、1回当たり10kgとか15kgを採って、高く引き取ってくれた八百屋さんなどに直接卸す様になった。

不思議なことに、辛いと思ったことは一度もなく、山の中に幼い子供が1人で入って怖いと思ったこともない。草花や鳥や虫などは、大好きと言うよりも友達のような感覚だった。

家庭環境が最悪でも、また、学校へもろくに行けなくとも、今風のイジメは一切なく、先生や友達が訪ねて来てくれて、勉強を教えてもらったりしていた。

【第2のポイント：山形県主催のジュニアリーダーキャンプに選抜】

当時の山形県知事が掲げた県の政策に、将来の地域リーダーの育成を目標とした「ジュニアリーダーキャンプ」制度というのがあり、小学校5年の時に選抜され、このキャンプで初めて、本格的な登山やキャンプなどを経験した。実際のカリキュラムは、技術的には初歩的なものだったが、自然との係わり方、登山技術、野営技術などを学んだ。ボーイスカウトなどの活動を経験していれば当然かもしれないが、私にとって団体での野外活動は初めての経験で、見るもの、やることなすことが全て新鮮で感動の連続だったことを覚えている。

【第3のポイント：15歳での自立・独立？】

家にお金がなかったので、6人兄弟のうち私以外の5人は、定時制高校、大学は法政大学などの二部（夜学）へ。自分だけが高校以上（高校と高専）で全日制に入らせて貰った。

この様な家庭の状況から、家から学費を出して貰えないため、高校受験の時に中学の担任の先生が見つけて下さったのが、国立の高校（普通課程では旧東京教育大学（現筑波大学）の附属高校があり、実業高校は先に述べた通り商船と電波があった）に入ることだった。

今でもそうなのか分からないが、当時の国立の学校の良いところは、第1に学寮が充実していること。学校の敷地内に寮があり、三食付き、二部屋貸与（寝室（ベッド、ロッカーあり）、勉強部屋（机、本棚等あり））。第2に学業成績が影響するが授業料免除制度、潤沢な奨学金制度（育英会、業界、学校独自、地域、その他）などが整備されているので、経済的に困窮していても、優秀な学生は、アルバイトなどしなくとも学業を全うできる様になっていた。

食事も、住むところも、学費も心配ないことから、私の様な子供にはピッタシだった。

必死だったこともあってか、入学でき、また、国の制度通り「1年で卒業」が出来た。人事院や旧文部省からも言われたが、「16歳で社会人になっていれば」、今と違う人生もあったかもしれない。

山形の片田舎から15歳の子供が一人で都会に出てきて、お金の困らない生活を初めて経験し、また、意

志が弱いこともあってか、知らず知らずに色んな遊びも覚えていった。遊びまわっていた割には、かなり成績が良く、授業料免除になったし、半端でない奨学金（一般的な若手サラリーマンの月給より多かった）も頂いて経済的な心配がまるで無くなっていたこともあり、すぐに社会に出る考えなど全く無くなってしまっていた。

このあと高専に入り直し、ここでもかなり成績が良く、授業料免除やほとんどの奨学金も継続できたため、やりたい放題だった。

この頃から「青葉城恋歌」のSさん達と音楽にのめり込んだり、ポイント2で述べた登山も、ほぼ毎週、奨学金をつぎ込んで北海道から九州までの高山低山関係なく登っていた。

奨学金が無くなると山でアルバイトし、金が出来るとまた山へ行くの繰り返しだった。

時代が良かったのか、先生や友達が良かったのか、全てが良かったんだと思う。

高校、高専時代では、山、音楽以外でも、カヌー（スラローム、ワイルドウォーター）を覚え、自転車（三陸縦断やヒルクライム etc.）を覚え、また、高専は学生数が少ないこともあって、山岳競技以外の、陸上競技、サッカー競技、カヌー競技、バドミントン競技などの大会に、掛け持ちの形で引っ張り込まれた。

結果、その後も長く付き合えた競技が、山岳は当然として、サッカーやカヌーだった。

現役としては、40代半ばで引退し、現在は座学や講習会やシンポジウムなどの講師で呼ばれたりしている。

今続けているのは、三競技のうち山関係だけで、現在は趣味の範疇になっている。

山や自然に係わる公の団体の日本自然保護協会の会員・日本野鳥の会の特別会員は継続しており、身体が動かなくなっても頭がはっきりしているうちは続けたらと思っている。

3. 職場とのあつれき

先にも述べた様に、山岳救助隊員になった時は、旧建設省（現国交省）の人事当局から「職務専念義務違反の恐れあり」で懲戒処分寸前となり、人事院から「建設省の業務も、山岳救助隊員の業務も、国体等の役員業務もすべて本業と認める」と裁定され一安心したことを覚えている。

この結果、報酬も頂ける様になり、モチベーションは上がるし、用具代や遠征代にもなるので大分助かった。この時、認められていなかったら、人生が大分変

わったかもしれない。

人事院からは「プロ」として認められたものの、人事当局からは目を付けられ、人事異動では、単身赴任で遠いところへの異動が多くなっていった。

例えば、宮城国体の競技役員の際は、宮城県とは遠く離れた千葉県の房総半島にある旧佐原市（現香取市）に配置されていた関東地建の事務所だった。

皮肉なことに、この時、サッカーで、千葉県の地域リーグで優勝している。

後日、自分の人事記録カードを確認させてもらったが、救助活動などで何度かあった警察からの表彰や感謝状なども含め、他機関での活動等は、人事記録カードへの記録など一切行われていなかった。ある意味で正解とは思いますが、なんか寂しい気がした。

4. 独身時代の山

山への接し方は、最初が生活費の足しにするための山菜採りから始まり、その後の初めての登山、勝手気ままな山行と移行していく。独身時代は、全て単独山行のみであった。

イジメなど一切なかったが、生活環境から子供なりのうっくつしたものがあつたのかな。

山上でテン張りし、満天の星に包まれた時の安らぎ、火傷しそうな熱いコーヒーをフウフウいいながら飲むときの至福の一時、大好きな草花に出会えた時の幸福感。…など。

自己満足と言われるかもしれないが、クライミングの時は、狙った岩壁を、イメージしたルート通りに切り切った時の達成感は最高、何物にも代えがたい気持ちになった。

ただ単独登攀なので、ボルダリングなどと違い、降りてくる時がかなり危険で大変。

自分なりに安全登山を心がけていたつもりだけど、岩壁のクライミングもほとんどがフリークライミングなどであったため、ちょっとでも手足を滑らせたら一発で死亡に繋がるなど、実際は危険そのものであった。

今考えると、小学生の段階から1人で山に山菜採りに行ったり、その後の冬山も、岩登りも、沢登りも全て単独行は、絶対止めるべきで、無茶・無謀としか言いようがない。

5. 扶養家族が出来て

21歳で社会人になって、23歳で結婚し子供ができたが、それまで1番の理解者と思っていた妻から「山

岳会など正式な団体に加入しなければ離婚。単独で山に行ったら離婚」と迫られ、しぶしぶ日本山岳協会（東京オリンピックでスポーツクライミングが正式種目になって、現在は日本山岳・スポーツクライミング協会に改称）傘下の宮城県山岳連盟所属の白峰会と、同じく山形県山岳連盟所属の西川山岳会に正式加入した。

白峰会は、宮城県白石市にあり、メンバーの中に山岳連盟の技術委員会の役員や宮城県山岳遭難対策協議会救助隊の副隊長など素晴らしいメンバーがおられた。

この白峰会で、自己流だった登山技術やクライミング技術を学び直せし、気の合う山仲間が沢山でき、必然的に山岳救助隊員にもなっていった。

また、国体やインターハイの競技役員に任命されたのもこの頃である。

西川山岳会は、山形県西村山郡西川町大井沢、朝日連峰の麓にある。北には夏スキーで有名な月山があり、四季を通じて山に親しむことが出来る環境にあった。

大井沢のみなさんは「旧マタギ」の末裔が多く、現在でも猟師を兼ねている方が多くおり、山岳会の会員にも沢山おられた。登山やクライミングでは前衛的な方が多かった。

クマの肉を初めて食べたりしたのも、この西川山岳会であった。

公の組織に入って活動し、他の方を指導したり、競技でジャッジしたりする様になると、また、遭難した方の捜索や救助を行うと、嫌が上でも自分を高めざるを得なく、また、いや応なく人の生き様に大きく関わるのが必然となってくる。このジレンマ…。

いずれにしても、私の山との係わり方は、独身時代と子供ができてからはガラッと変わってしまい、当初は自分でも戸惑ってしまうことが多かった。

6. 山に包まれて

運命論者ではないが、家庭・生活環境が劣悪でも、すぐ傍に田畑があり、山があったお陰で家族は飢えずに済んだし、生活費を稼ぐことも出来た。

また、辛いことや泣きたいことがあっても、山に行けば、山に抱かれ・包まれ、草花と接し、鳥と戯れることが出来れば、心が癒され、辛いことや泣きたいことが雲散霧消し、人生の道を外さずに歩んで来れたのだと思う。

若い時に、望外な奨学金を受給し、未成年ながら、かなりの現金を持っていたので、賭け事、異性や酒などの誘惑があった。

そちらへよろめいてもおかしくなかったのに、結局、

山や自然やスポーツの道に進んでいったのは、山や自然との絆などが、導いてくれたのではないだろうかと思っている。

もう一つ、小学校から山菜採りや単独山行をやっていて、その後も危険なフリークライミングや山岳救助隊員をやっていたのに大きな事故やケガが一度もない。

実際は、小学校4年だか5年の時に山菜採りに行って、沢で足を切る怪我をしている。

この時は、おばあちゃん達に教えてもらっていた止血法などで対応した。

また、救助隊員の時に冬山で捜索中に雪庇を踏み抜き、相棒の警官とともに滑落し、二重遭難事故を起こしている。

この時は40m～50m落ちて、相棒が自分のピッケルで額を切る大怪我をしてしまったが、こちらは無傷だった。また、雪庇を踏み抜いたのに雪崩が発生しなかったのも不思議であった。

これら以外でも、登山中に目の前のハイ松に雷が落ちたり、雨量観測所の調査中にクマに追いかけられたり、山上でテン張りビバーク中にテントが飛ばされたりなど、遭難や大事故になりそうな経験をかなり積んでいるが、身体に傷を負ったのが小学生の時の足を切った1回だけだった。山に感謝。

よく山の仲間や先生、友達から「山が守ってくれているんでは」と言われてきた。

7. 山岳遭難に想う

日本では、毎年3,000件前後の遭難事故が発生する。それらの事故で350名前後の死亡者も出てしまう。(令和1年警察庁データを基に、数値だけはまるめ処理)

目的別：登山・ハイキングで約70%，スキー登山・スキーで約5%，山菜・タケノコ採りで約15%，観光で約5%。

年齢別：60歳代～80歳代で約50%，40歳代～50歳代で約30%。

30歳代約10%，20歳代以下約10%。

原因別：道迷い約40%，滑落約20%，転倒約15%，病気約10%，疲労約10%。

死亡者：約80%が40歳以上。

遭難の多い都道府県は、①長野県、②北海道、③東京都、④山梨県、⑤神奈川県。

データ・数字の捉え方は、それぞれの立場、登山など山関係の知見、行為の技術力などによって異なるのは当然として、私自身のイメージと大きく違ったのが

山菜採りでの遭難が意外と少ないことで、もっと大きな割合になると思っていた。

私も含めて山に入る時に注意すべきは、次のとおりで、特効薬はないと思う。

- 肝に銘じることは、年寄りでも若くとも、自分の体力などを過信しない。
- 高山でも低山でも里山でも、登山でもハイキングでも、絶対無理をしないこと。
- 持病などがあつたら主治医の先生によく相談して。
- 登山届を必ず出す。家族・友人に行き先を話す。ルート変更は必ず連絡する。
- 悔しいかもしれないが、山菜採りなどで自分の秘密の山は持たないこと。

東京都がトップファイブに入っていて、驚いた方が多いと思うが、東京都には奥多摩などもあり、また、雲取山など2,000 m級の高山もある。

それなのに簡単なハイキング感覚で登られる方が多いからだと思う。パンプスで登ろうとした女性に遭遇したこともあった。

参考だが、日本の最高峰は富士山で4,000 mもない。世界には8,000 m級のヒマラヤ山脈や4,000 m級のヨーロッパアルプスなどがある。

しかし、世界で遭難死者数の一番多い山は、日本の谷川岳なのである。

不思議に思われるかもしれないが、谷川岳の遭難死者数は、ヒマラヤにあるエベレストをはじめ8,000 m級の14の山より圧倒的に多い約800名。

14座の総計でも約650名。

また、死者数は別として、一度に100名を超える大量遭難した山は、世界でも珍しいが、全て東北にある。

ご存じの八甲田山は、旧日本陸軍青森歩兵第5連隊の210名遭難（死亡199名）。

一般にはあまり知られていないが蔵王山では、旧制仙台2中（現仙台2高）の155名（死亡9名）、吾妻山では、福島女子師範学校の145名（死亡4名）の大量遭難事件があった。

ただし、大正時代に発生した蔵王山と吾妻山の遭難は、参加者全員を遭難したとカウントするかどうかの問題はあるが。東北の山は深い。

詳しい顛末は割愛するが、蔵王山の場合、八甲田と似ているのが、総責任者が退役軍人であったこと、登山経験者が一人もいなかったとか、せっかくの案内人を途中で返しているなどなど、あまりにも山を軽く見た、無謀、人災と言っても過言ではないかもしれない。

吾妻山の場合、蔵王山と真逆で、引率者はベテランの登山家。さらに集団登山である事を考慮して案内人まで雇い、事前に測候所へ山の天候等も確認している。

唯一の疑義点は、距離は多少長くなるが、起伏が少なくゆったりしたコースを選択せず、距離は短い起伏の激しい、きつい直登コースを選択していること。

結果は、天候急変が直接の原因ではあるが、どちらも大量遭難で死亡者を出してしまった。

元々の無謀無茶はもつての外としか言えないが、山では準備万端と思われても、ちょっとした判断の違いで大きな事故に繋がることもある。

私の場合、日本の山が中心で、いわゆる百名山・二百名山はその頂きに登らせてもらい三百名山も残り少なくなっている。外国の山は東南アジアの山のみである。

でも、それでその山々を征服したことにはならず、その山の厳しさも優しさも分かったことにはならないと思っている。その山の一瞬を覗いただけに過ぎないと思う。

結局、「征服した」などと言うのは人間の傲慢であつて、その山の懐に10年住んでみて初めて友達になって、30年位住んでみてやっと家族になって行く様なものではないだろうか。

8. おわりに

読者の皆様や会員の皆様にも謝らないといけないのが、最初の構想では写真をふんだんに使う予定でしたが、昨年、家のリフォームをやった際にアルバム、写真、ネガ、SDカードなど1式を紛失してしまい使用できなかったことです。

元々、手掛けてきました遭難事件の場合、遭難された方のご遺族などにご迷惑をお掛けできないので、特定できる様な写真など資料は一切使えないのですが、救助隊の捜索中のもの、訓練中のものなどでもインパクトがあるのでお見せしたかったのです。

国体やインターハイの競技中の写真なども良いものがありましたし、花や鳥の写真にも良いものが沢山ありました。

申し訳ないです。心よりお詫び申し上げます。

機会がありましたら、みなさんと山、植物、鳥等についてデスカッションしたいです。有難うございました。